明代チベットの八大教王について〔下〕

佐藤長

〔略語表追加〕

元末明初＝佐藤長「元末明初のチベット状勢」明代滿蒙史研究所收、京都、昭和三十八年。

REB＝Rolf A. Stein, Recherches sur l'épopée et la barde au Tibet, Paris, 1956.

IT＝Giuseppe Tucci, Indo-Tibetica, IV. Rome, 1941.

一二

とにかくタシーラグパは父ガーギワンチュを失った一四九一年には四歳であり、ガーギはこのことを非常に氣にかけながら世を去った。そこでその後見者が考えられたが、それについてダライ佛教史は次のごとくいう（TPS. p. 640）、

チェンガ・チョエキラグ Spyan sṅa Chos kyi grags は太子が成長し、デシの職をとるまで、テル Thel 及びゾェタンの大臣、高職者とともに命を發し、官職を任ずる權威をもて、テルのチェンガの重任を負うことを承諾せり。

チョエキラグはダライ佛教史ではここに突然現れてくるので理解し難いが、トゥッチ氏は系圖の中で、リンチェンドルジェの子とし、ガーギワンチュの兄弟と見ている。しかしガーギがリンチェンの子でなくて、ラグパジュンネーの子であることは先に述べた。然らばチョエキラグパのみは確にリンチェンの子であろうか。このことを明かにするにはやはりマルボ史を先ず檢討しなければならない。

第一に（DMS. p. 70b）、

〔ガーギワンチュは〕ペル・チョエキラグパ帝師 Dpal

Chos kyi grags pa ti çrhi に依りて大乘の法典を數多聽聞したり。

とあるのは、確に同一人物を指すと思われるが、これによって彼はガーギの師に當るような優れた人物であることが推定される。第二にガーギが死んだときのこととして、パグモドゥの有力者等が集り（DMS. p. 71a）、

活佛寶者 Sprul sku rin po che の御考慮を願い、後見として宗家寶者 Gduṅ rgyud rin po che（＝タシーラグパ）の成長するまで、彼等は援助する方法をとれり。

というが、ダライ佛教史と比較して明かにこの活佛寶者はチョエキラグパである。而して癸丑の年（一四九三）には法主活佛 Chos rje sprul sku がテルのチェンガに任ぜられたことをいうが（DMS. p. 71a）、これ亦前者と同一人であることはまちがいない。更に甲申の年（一五二四）にかけて、

ヤンパチェン Yaṅs pa can においてチェンガリンポチェは御年七十二歳にて僧院に靜けく逝きたまいぬ。

とあるのも同一人と見て差支えなく、これによってチョエキラグパは一四五三年の生れであることを確認することができる。一四五三年というと既にドルジェリンチェンは歿しているのであるから、トゥッチ氏のように、前者を後者の子とすることは全く成立しない。或はガーギの弟とすることも考えられないではないが、やはりその父のラグパジュンネーは一四四五年に歿しているので關係はない。結局チョエキラグパはその頃のパグモドゥ王家とは血統の關係のない別派の人物であろうということになるが、然らば果して他の何人に當るのであろうか。

この問題を解くために、我々は先ずテルのチェンガの系統を一應辿らなければならぬ。ポティセルゥⅡの問答第十三には、各代のチェンガの在位年數を掲げているが、それによれば（PTSR. II. p. 54）、

ツェニーパ Tshes gñis pa は三十八年、それよりシャマルチョエパンチェン Shwa dmar cod paṇ can、チェンガ・ラグジュン二世 Gragsḥbyuṅ phyi ma なり。

とある。ツェニーパはいうまでもなくガーギワンチュ、チェンガ・ラグジュン二世はダライ佛教史にタシーラグパの第二子として出てくるチェンガ・ラグジュンパ（＝ラグパジュンネー）に相違ないが、その間には明かにシャマルパ

の管長シャマルチョエパンが數えられているのである。ケーペーガトンにもテルの座主の在位年數を列記したところには最後に（PT. p. 409）、

ニェルニーリンボチェ Ñer gñis rin po che ソェナムギェンツェンは十八年、その間聖者は多く出で、後にシャマルチョエパンジンパ四世 Shwa dmar cod paṇ ḥdsin pa bshi pa は座主を暫く勤めたりしが、大概はラン・ラーシグ氏の一族が座主そのもの又は代理を勤め、その系統は絶えざりき。

とあってシャマルパ第四代が存在したことを示している。シャマルパはシャナグパ同様、代々轉生活佛によって法統を嗣ぐから、チョエキラグパがマルボ史で「活佛寶者」と呼ばれた原因はここに至って遂に氷解する。

シャマルパ第四世の名は普通にはチョエラグイシー Chos grags ye çes であるから、チョエキラグパは正にこの名の前半を寫したものとしなければならぬ。第四世については、ケーペーガトンはカルマパ大ラマの傳記のうちにも詳細に述べているから[1]、それを參照すると、

御年二十四歳丙申の年（一四七六）にはガンデンマモ Dgaḥ ldan ma mo より出發し、ダグポ Dwags po、オルカ Ol kha を通り、デンサテルとツォンドェラッカ Tshoṅ ḥdus brag kha 等に至りたまいぬ。前にコンボにおいて會われたる尊者イサンヅェパ Yid bzaṅ rtse pa と尊者等御二人にラーシグラン氏の帝師 Ti çri とされ、主人として奉仕の厚禮を受け、チェンガリンボチェ（＝ガーギワンチュ）は敬禮を大に盡したまえり（PT. p. 594）。

癸丑の年（一四九三）二月には……デシ・パグモドゥパの高官等は、ロゴンリンボチェ Ḥgro mgon rin po che（＝開祖パグモドゥパ）の牀座 gdan sa に至りて、その一族の兩派（テルとヅェタン）の保護者となられんことを願いたり……〔よって彼は〕大デンサの牀座に就かんことを諾いて、後高御座に至り、デシ・パグモドゥパの兩派の首誦者 dbu ḥdon となれり（PT. p. 603）。

御年七十二歳猿の年（甲申、一五二四）十一月二十五日に御心を普く憂より解きたまえり（＝涅槃に入りたまえり）（PT. p. 611）。

とあって、先に確定した年代、事實と全く一致する。

シャマルパには、活動的で政治的野心の多い活佛が輩出したが、この第四世もその例に漏れなかった。當時パグモドゥパ王朝の下で最も勢力のあったのはリンプンパ Rin spuṅs pa の諸侯であるが、一四八一年にリンプンパは中央チベットにおけるパグモドゥの權威を完全に打倒してしまった。而してこの第四代シャマルパを最もよく後援したのがリンプンパであったことは充分注意する必要がある。しかし第一等の實力者のリンプンパが如何に推薦したからとはいえ、傳統のあるデンサテルの大寺院の座主までを一時他派に委ね、王朝の後見を依頼しなければならなかったのは、もはやこの王朝が末期的症狀を呈していたことを示すものに他ならない。闡化王としてのラン氏の系統はこれより三派に分れ、昔の面影は更になく、リンプンパにその實權は奪われ、リンプンパも亦後にその家臣に支配を覆されて、チベットは再び完全分裂の時代に突入するのである。

一三

第五は闡教王リゴンパ Ḥbri guṅ pa であるが、これに關する諸問題は別稿で述べた。[12] そのうちで實は二つばかり不確實な記述を殘したので、それらについてここで些か補をつけておきたい。

第一は座主の繼承で、Jドルジェギェルポと Lドェンルブギェルポの親子關係が甚だ無理な關係であったことである。ケーペーガトンによる我々の計算では、前者Jは一三五〇年に死し、後者は一三五七年に生れたことになるから、その間に七年の間隔があり、親子關係の設定は實は困難であった。前稿では一妻多夫制を假定して、ドェンルブの實母がドルジェの死後その兄弟の何人かに嫁し生んだものとしたが、これは些か考え過ぎであった。恐らくケーペーガトンにおける「父」ドルジェギェルポはその弟ドルジェペル Rdo rje dpal の書寫の誤で、ドェンルブはドルジェペルの子とすべきであろう。ドルジェペルの在世年代は不明であるが、兄より七年以上長く在世したと見ることは差支えなく、又俗人であったことは疑ないから子があっても何等不自然ではない。Jドルジェギェルポは座主であるから子のないのが當然であり、事實リゴンパではそれまで伯父より甥への座主の繼承が普通であって、座主が結婚し

た例はない。座主の結婚はLドェルブギェルポから漸く始まるが、それには血統の斷絶のような何か止むを得ない事情が伏在していたのであろう。

とにかくドェンルブギェルポはドルジェペルの子として考えるべきであり、J・ドルジェギェルポが歿したとき、その甥等のうちで年長のK・ニェルニーパ Ñer gñis pa が後を繼ぎ、その死後、L・ドェンルブギェルポは四十五歳で漸くその後を繼いだのである。

第二はガンギェルの僧院の問題であるが、この寺院の歴代の僧院長については前稿では專らテプゴンによって述べた。しかしヴァイセルによると、より詳しく二三の疑問が解けるので、それをここに紹介したい。

第一の創設の問題についてはヴァイセルは次のごとくいう（VS. p. 175）。

リゴンのジグテンゴンポ Hjig rten mgon po[8]（＝リゴンパ）の弟子得成就者ツァンシブパ Gtsaṅ shib pa[4]は、ラマの懸記せられしごとく、廣く〔各處の〕寺院において禪定に住せられしが、或るとき施食の器物を鵞鳥 ñaṅ pa が持來りて北山 Byaṅ ri の側に運びたるにより skyal bas、空行母の懸記なりと覺り、そこに寺院を建て、名をガンギェル Ñaṅ skyal と稱せり。

ガンギェル寺院の因縁譚であるが、これによって、テプゴンの Ñaṅ rgyal は誤で、Ñaṅ skyal の綴字が正しいことが分る。

ヴァイセルは續いてその歴代僧院長の名を、

一、シャンラ Shaṅ bla
二、ギェルワ Rgyal ba
三、シリン Gzi rin
四、ニェルシグパ Gñal shig pa
五、ギェルワセンゲ Rgyal ba seṅ ge
六、ラマセルワ Bla ma gsal ba
七、リンギェル Rin rgyal

の順で擧げるが、テプゴンのそれと比較すれば、[5] 五代まではテプゴンのうちにその名はなく、（六）ラマセルワ＝セルジェワ、（七）リンギェル＝ケールブリンチェンギェンツェンの比定が可能なだけである。ヴァイセルは更に、これよりラマ二人程ありて絶え、ジャムゴンラマ Hjam mgon bla ma（＝ツォンカパ）の宗派に變りたり。

とあるから、ガンギェルは早くも第九代以後にはゲルグパの宗風へと變ったのである。尤も續いて、

十、チョエギェルリンチェン
十一、リンチェンロトェ
十二、リンチェンペルサン

が擧げられ、これらはテプゴンの系統圖[5]と一致するが、更に、

彼（＝リンチェンペルサン Rin chen dpal bzaṅ）の甥によりて尊者ゲドンギャムツォ Rje Dge ḥdun rgya mtsho にこの寺院は獻げられたり。

とあり、遂に寺院そのものもリンチェンペルサンの次代になって所屬をゲルグパへと變えてしまったのである。ゲドンギャムツォはいうまでもなく所謂第二代ダライラマである。

ヴァイセルの示す僧院長の系譜は曖昧なテプゴンよりは些かましとも思われるが、結局はリゴンの座主との關係をより一層明かにする程のものではない。今は唯珍しい一つの史料として提示するに止めたいと思う。

一四

第六は贊善王である。この王については明傳は、

贊善王者靈藏僧也、其地在四川徼外、視烏斯藏爲近。

という。靈藏の位置については四川通志の記述が參考になる。卽ち嘉慶重修四川通志卷九七、九八に四川布政司所屬の大土司を列擧して、そのうちに林葱安撫使司というのを數えているが、恐らくこれが靈藏と同一なのであろう。それによれば林葱は、南はデルゲ Sde dge に接し、北は蒙葛結に接している。ロックヒル W. W. Rockhill によれば、蒙葛結は Rje kun mdo であるから[6]、林葱はジェクンドとデルゲの間にあることになる。前述のごとくケーペーガトンにはツァンシンワン Tsan çin waṅ がリンツァン Glin tshaṅ の僧であることをいっており（元末明初五五二頁）、そのチベット語の原形は明かになった。又スタン氏は靈藏の說明に、鄧誠がチベットに使したときの通路は罕東から靈藏を通って必力工瓦 Hbri guṅ pa、烏思藏 Dbus gtsaṅ（ラサ地方）と行っているのを引用しているが（REB. p. 211）、これも靈藏が東チベットにあったこ

との傍證となるであろう。

遺憾なことにはこの宗派が如何なる系統に屬するかについてはチベット文獻には何等記載はない。唯トゥッチ氏はニャン Myaṅ（＝Naṅ. ギャンツェ地方）の年代記であるニャンチュン Myaṅ chuṅ にサキャの宮廷における四大ナンチェン Naṅ chen を擧げているが、その一人にリンツァン Glin tshaṅ を數えているから（IT. IV. p. 83）これによって贊善王の系統はサキャパの一派であるということになるであろう。スタン氏も同じくトゥッチ氏の記述により、このことを確認しており（REB. pp. 226, 238, n. 10）、先はこの推定は誤ないものといえるのである。

さて先に度々觸れたごとく成祖は卽位すると直に僧智光をチベットに遣し有力なラマの招撫を行わせたが、智光の目的地の一つには明かにリンツァンが數えられていた（實錄洪武三十五年八月丁巳の條、史料四八頁）。その努力によってか、永樂四年二月には館覺靈藏等處の使臣端竹藏卜が來朝したが、端竹藏卜 tuœn tɕy̆ tsɑŋ pʊ は Don grub bzaṅ po と還元される。而して翌三月には靈藏の着思巴兒監藏 tɕy̆ sl pa ʑl tɕiɛn tsɑŋ〈Chos dpal rgyal mtshan が靈藏灌頂國師を命ぜられ（史料五一頁）、次いで五年三月には彼は贊善王に封ぜられた（史料五五頁）。彼が灌頂國師になったのは遣使來朝の故であろうが、更に贊善王に封ぜられたのは、前にも述べたごとく恐らくは既に入朝していたデシンの推薦によっているのであろう（元末明初五五二頁）。

チョエペルギェンツェンの後繼者については明傳には、

洪熙元年、王（＝チョエペルギェンツェン）卒、從子喃葛監藏襲。

とあり、喃葛監藏 nɑm ko tɕiɛn tsɑŋ 卽ち Nam mkhah rgyal mtshan が後を繼いだごとくいう。一方實錄永樂二十年三月辛酉及び同二十一年二月乙卯の條にはともに、贊善王吉剌思巴監藏巴藏卜が汝奴星吉を使として來朝させたことが見えている（史料七〇、七一頁）。吉剌思巴監藏巴藏卜 tɕɪ la sl pa tɕiɛn tsɑŋ pa tsɑŋ pʊ は Grags pa rgyal mtshan dpal bzaṅ po であろうし、汝奴星吉 ʑy̆ nu siŋ tɕɪ は Gshon nu seṅ ge であろう。而してナムカギェンツェンの就任について實錄洪熙元年の條には何等對應記事は見られない。しかし後述のごとくナムカがその後を

子のペンデンギャムツォに讓らんとしたときの詔勅にはナムカに對して（史料一四六頁）、

太宗文皇帝臨御之日……朝廷特封爾叔着思巳監藏爲靈藏灌頂國師贊善王、逮我皇考宣宗章皇帝嗣位之初、俾爾襲封王爵已有年矣。

とあるところを見ると、ナムカが洪熙元年に就任したことは確實である。

一方チョエペルギェンツェンは、永樂十七年十月に楊三保がチベットに使したときに往訪した大ラマの一人に數えられているから（史料七〇頁）、少くとも永樂十七年までは彼は在世していたことになる。ついで二十年に遣使したのは贊善王ラグパペルサンボであるのを見ると、この間に王の交代があったと一應考えなければならない。しかしこのラグパの名はこのとき實錄に出てくるだけで、又事實在位したとしても洪熙元年までは僅か三年ばかりであり、果して眞實の後繼者であったのかどうか疑わしい。少くとも明側ではこれを贊善王に封じた記錄はなく、從って次の贊善王が立つまでの代行者として彼は存在したのではなかったかと思われる。臆測は種々に立てられるが、一應この間の經緯は右のようなものであったと考えておきたい。[7]

ナムカギェンツェンの名が實錄に初めて現れるのは宣德二年四月辛酉の條で、太監の侯顯がこのとき往訪した相手の大ラマの一人に數えられている（史料八六頁）。贊善王はこの後喃葛監藏巴藏卜 naṁ ko tɕiɛn tsaŋ pa tsaŋ pu（史料一〇六、一〇七、一六五頁）、喃哥兒監藏 naṁ ko ɹ̩ tɕiɛn tsaŋ（史料一二二頁）、南葛監藏巴藏卜（史料一六六頁）等の名で宣德八年まで現れるが、何れもナムカギェンツェンその人であることは疑ない。

正統十年（一四四五）には贊善王はナムカの長子ペンデンギャムツォに代えられた。卽ち實錄に、正統十年六月辛亥「贊善王南葛監藏巴藏卜姪班丹監剌」に降した勅諭として（史料一六六頁）、

今爾叔奏稱、年老不能管事、爾班丹監剌乃其親姪、克承梵敎、恪守毘奈、多人信服、請代其職、特允其請、命正使禪師鎖南藏卜、副使剌麻剌什班丹等、同指揮斡些兒藏卜、賫捧勅諭誥命、封爾班丹堅剌、爲靈藏灌頂國師贊善王、代爾叔掌管印章、撫治番人。

とあるが、班丹堅剌 puan tan tɕiɛn tsʻuo は Dpal ldan

rgya mtsho であり、鎖南藏ト suo nɑm tsɑŋ pu は Bsod nams bzaṅ po、劄什班丹 tɕʻa ʂi puan tɑn は Bkra çis dpal ldan、斡些兒藏ト uo siɛ ɹ̩ tsɑŋ pu は Ḥod zer bzaṅ po であろう。これによれば王の交代はナムカが年老いたために止むを得ず朝廷に願出てその甥ペンデンに職を譲ったことになる。尤もこのような請願は正統六年に既に行われていた。實錄正統六年四月辛卯にナムカに與えられた勅に（史料一四六頁）、

今爾遣永隆監藏、鎖南端竹前來朝貢、并奏、見今年老、欲令長子班丹監剌嗣封贊善王、次子巴思恭藏卜爲都指揮。

とあるのがそれで、英宗はこのときは許可せず、ペンデンを都指揮使として父に代って本都司のことを司らしめ、巴思恭藏卜を指揮僉事となして兄を助けしめるに止めた。この文に出てくる永隆監藏 yŋ lyŋ tɕiɛn tsɑŋ は G-yuṅ druṅ rgyal mtshan、鎖南端竹 suo nɑm tuœn tʂʻy は Bsod nams don grub、巴思恭藏卜 pa sɿ kuŋ tsɑŋ pu は Dpal skyoṅ bzaṅ po と還元されるが、注意すべきはペンデンが長子とあるに拘らず、正統十年の詔では姪になっていることである。今この何れが正しいかは直に明かにすることはできないが、恐らくは姪が正しいのであろう。尤もこの頃一部の貴族の間にも行われていた一妻多夫制の一例とすれば、それは子でもあり同時に姪でもあるから何れも正しいことになる。とにかく王の交代は明傳に全く觸れていないに拘らず正統十年に行われたとしなければならないのである。

成化三年（一四六七）にペンデンの後に王統を繼いだのは塔兒巴堅粲 tʻa ɹ̩ pa tsiɛn tsʻɑn であるが（史料二四五頁）、明かに Thar pa rgyal mtshan と還元される。ケーペーガトンは第七代カルマパ・チョエラギャムツォの傳のうちに（PT. p. 554）、

豚の年（丁亥、一四六七）の新年を濟ませ、リンツァンの贊善王タンペギェンツェン Tsan çin dbaṅ Thaṅ pa rgyal mtshan は居館 Gser khaṅ に〔彼を〕請導し、多くの贈物を獻げたり。

というが、この年は封爵の命の出た年であり、タルパの實際の襲職はそれより少しく遡るとしなければならない。スタン氏もこの史料は既に引用しているが、テキストの Thaṅ pa は、氏のいうごとく Thar pa を正しいものと

しなければならないと思う（REB. p. 214）。

ついで實錄成化十二年八月戊寅の條には、「贊善王班丹堅千」が遣使來朝したことをいうが（史料二七一頁）、班丹堅千 puan tɑn tsiɛ̃n tsʻiɛ̃n は Dpal ldan rgyal mtshan であろう。このラマの名はこの個所にしか現れず、從って在職の年次も亦定めがたい。その故か明傳には彼の名は全く記されていない。

而して同じく十八年閏八月辛卯の條には、喃葛堅粲巴藏ト nɑm ko tsiɛ̃n tsʻɑn ɓa tsɑŋ pʊ̀ が贊善王に封ぜられたことをいう（史料二八七頁）。明かに Nam mkhaḥ rgyal mtshan dpal bzaṅ po であるが、彼の在職は凡そ弘治十六年までである。

ついで弟の端竹堅昝が弘治十六年九月に番僧の阿完を遣して襲職を請うた。端竹堅昝 tuœn tsʻɨ̀ tsiɛ̃n tsɑm は Don grub rgyal mtshan、阿完 o uœn は Ṅag dbaṅ と考えられるが、在職は嘉靖二十二年（一五四三）その甥の端岳堅昝が後を繼ぐまで續く（史料三八九頁）。端岳堅昝 tuœn io tsiɛ̃n tsɑm は當然 Don yod rgyal mtshan と還元すべきである。

贊善王とその他の諸派の關係、又はリンツァンの一般的狀勢に關してはスタン氏が詳細な研究を發表しており（REB. p. 211）、我々がそれに附加し得るものは殆どない。唯實錄によって、贊善王には若干の異同があることをここに記して參考に供した次第である。

一五

第七は護教王であるが、明傳には、

護教王者宗巴幹即南哥巴藏卜館覺僧也。

と述べている。宗巴 tsuŋ pa は恐らく「高貴なる(もの)」「高僧」の意味をもつ btsun pa を寫したもので、[8] 幹即南哥巴藏卜は實錄にはすべて斡即南哥巴藏卜 uo tɕɨ nɑm ko pa tsɑŋ pʊ̀ とあるから Ḥod zer nam mkhaḥ dpal bzaṅ po を寫したものであろう。館覺 kuœn tɕɑʊ̀ [9] は從來何人にも解き得ない名稱であったが、ケーペーガトンにはやはりデシンの奏請による教王の封爵の一つとしてゴンジョ Gon gyo を擧げており（PT. p. 522. 元末明初五五二頁）、更に Gon gyo Hu kyaḥu waṅ（＜護教王）ともいっているから（PT. p. 524）、Gon gyo 又は Go ḥjo（REB.

p. 223）であることは疑ない。而してその位置はスタン氏が示しているごとくデルゲの西南、チャムドの東北東に當る地點である（REB. Carte du Tibet oriental）。

この派が如何なる宗派に屬するかも從來頗る難解な問題であったが、ニャンチュンによれば、やはりサキャパのナンチェンの一人にゴンジョの系統が擧げられているから（IT. IV. p. 83）、スタン氏同樣これをサキャパの一派と見なしておきたい（REB. p. 238, n. 10）。

ゴンジョはリンツァンとも近く、同じ宗派であるから相互の聯絡も密接に行われたのであろう。前述の永樂四年二月に來朝した使臣ドェンルブサンボは「館覺靈藏等處使臣」と呼ばれて兩大ラマの使者を兼ねている（八〇頁）。而して翌三月にはリンツァンの大ラマと同時にオェセルナムカペルサンボは館覺灌頂大國師を命ぜられた（史料五二頁）。翌五年二月にはオェセルは剌思巴兒監藏 tɕa ɕl pa ʑl tɕiɛn tsɑŋ〈Grags pa rgyal mtshan を使者として貢馬したが（史料五四頁）、明傳は「遣使入謝」というから謝恩の意味での入朝であることはまちがいない。續いて三月丁卯には護教王に封ぜられたが、その事情はリンツァンをはじめ併記されている諸王の場合と同樣であろう。

オェセルナムカは永樂十三年頃に歿し、その後は甥の斡些兒吉剌思巴藏トが護教王となる。明傳にはオェセルナムカが十二年に歿したことをいうが、實錄には對應記事はない。しかし十三年にその甥が護教王になったことは實錄同年五月丙辰の記事によって明かである（史料六五頁）。斡些兒吉剌思巴藏トは實錄宣德四年四月初の條には斡些兒吉剌思巴八藏ト *uo siɛ ʑl tɕɪ *la ɕl pa pa tsɑŋ pü とあるが、後者の綴字が正しく、Ḥod zer grags pa dpal bzaṅ po と考えられるものである。

護教王の事蹟は宣德四年四月のオェセルラグパの遣使入貢を以て終り、その後は絶えて史上には現れない。明傳はオェセルラグパについて、

洪熙宣德中、並入貢、已而卒、無嗣、其爵遂絶。

といって、これを以て護教王の系統が斷絶したことを明かにしている。

さて第八は輔教王である。この王に關して明傳には、

輔教王者思達藏僧也、其地視烏斯藏尤遠。

とある。この思達藏 sl ta tsɑŋ の地が何れにあるかが又

頗る難問で、從來何人もこれを解いたものはなかった。唯トゥッチ氏が初めて明傳の五教王を紹介したときに、輔教王をタグツァン Stag tshaṅ の僧であると述べ（TPS. p. 25）、又次のごとくいう（TPS. p. 92）。

私はタグツァンを判定するのに充分なデータを缺いている。しかしもしラダクのヘミ Hemis の創設者が同じ派に屬するものとすれば、彼等はカーギュパの一派と考えられる。

トゥッチ氏についてフェラリ女史 A. Ferrari はキェンツェの案内書により、オンブゥのタグツァン Ḥon bu stag tshaṅ なる地名を捜出し、それはカーギュパの一派タグツァンパ Stag tshaṅ pa の中心で、一時隆盛を極めたが、現在では何等その存在は知られず、恐らく滅びたのではないかといっている（GHP. p. 120）。

フェラリ女史のいうオンブゥのタグツァンは女史の示した地圖の上ではデンサテルの北北西に當るが、それは果して明傳のいう思達藏であろうか。明傳に、「その地は烏思藏に視べて尤も遠い」というからには、常識的にはラサより西方、恐らくはサキャよりも尚遠くの地にその存在を求めなければならない。そのようなことを念頭に置いて我々はトゥッチ氏の示すサキャパの系圖を見ると、ドゥエチョエ系の開祖クンガーレグページュンネーギェンツェンペルサンポ Kun dgaḥ legs paḥi ḥbyuṅ gnas rgyal mtshan dpal bzaṅ po の子にタグツァンゾン Stag tshaṅ rdsoṅ に生れたラグパギェンツェン Grags pa rgyal mtshan（一三三六―一三七八）なる人物を發見する（TPS. Genealogical Tables）。しかし彼の子孫がドゥエチョエ系としてその後繁榮するのであるから、これがタグツァンパ等であるはずはない。[10] しかし更に進むと彼の曾孫のワン・ナムカレグペーギェンツェン Dbaṅ Nam mkhaḥ legs paḥi rgyal mtshan は大明王 Ta miṅ rgyal po から一四一五年に Kya ho waṅ の稱號を與えられたという。トゥッチ氏は Kya ho waṅ 卽ち Chao wang（教王）であるというが、それは多分 Ho kyaḥo waṅ の誤で、これこそ正に輔教王そのものでなければなるまい。

尤も元代にも既にタグツァンパはモンゴルの朝廷に出入していた。ウラン史を見ると、トガンテムル（順帝）が帝位を棄てたとき「タグツァンパのパーリ・クンガーリンチ

ェン」Stag tshaṅ pa Dpaḥ ri Kun dgaḥ rin chen なるものが大都にいたことが記されている（RA. p. 15a）。この記事は決して本來ウラン史にあったものでなく、後からの附加であることは明かであり、クンガーリンチェンがドゥエチョエの家系に屬するものでないことも確であるが、この系統のものが元朝と聯絡あったことの一つの證據にはなるであろう。

つずいて明代に入るとタグツァンパの最初の入貢者は洪武六年十月の國公哥列思監藏巴藏トで、それが右に述べたラグパギェンツェンであろうことは前に述べた（元末明初五三一頁）。しかし明確にタグツァンパとして明代の歴史に現れてくるのは、永樂十一年五月丙戌に「思達藏輔教王」に任ぜられた南渴烈思巴を以て最初とする（史料六三頁）。南渴烈思巴 nɑm k'o liɛ̃ sl pa はいうまでもなく右に述べたナムカレグペーギェンツェンで、彼が一四一五年（永樂十三年）に輔教王に任ぜられたというのは、正に永樂十一年に發せられた封爵を二年後に受取ったことを意味するものに外ならない。永樂十一年二月には前にチベットに派遣された中官楊三保が歸還したばかりであり、恐らく彼の齎した情報がこの封爵授與を決定せしめたのであろう。尚參考のためその系圖をトゥッチ氏の研究から必要な部分だけ轉載すると次頁の〔第四表〕のごとくなる。

ナムカレグパの遣使は二度程で終っており、ついで現れるのは實錄景泰七年夏四月庚戌の條の「四川烏思藏達滄輔教等王喃恰勒巴羅骨堅千伯」の遣使來朝である（史料二〇六頁）。達滄 ta tsʻɑŋ は Stag tshaṅ であり、王名喃恰勒巴羅骨堅千伯 nɑm tɕʻa luei pa luo ku tɕien tsʻien pɑi は Nam mkhaḥ legs paḥi blo gros rgyal mtshan pa と還元されるが、これが南渴烈思巴と同一人であることは疑ない。同じく六月癸丑の條に胡濙の奏によるとして（史料二〇六頁）、

封荅蒼地面王子喃葛堅粲巴藏卜、襲爲輔教王。

とあるが、この荅蒼 ta tsʻɑŋ もタグツァンであり、喃葛堅粲巴藏卜 nɑm ko tɕien tsʻɑn pa tsɑŋ pu は明かに Nam mkhaḥ rgyal mtshan dpal bzaṅ po であろう。實錄はその翌年天順元年九月辛巳の條に更に（史料二一二頁）、

遣正使灌頂國師葛藏、副使右覺義桑加巴等齎勅誥幷綵幣

僧俗衣帽鈴杵等物、封荅蒼喃葛堅粲巴藏卜、襲爲輔教王、以其父喃葛列思巴羅竹堅粲巴藏卜奏年老不能視事故也。

〔第四表〕

- Grags pa rgyal mtshan
  - Kun dgaḥ legs paḥi blo gros rgyal mtshan dpal bzaṅ po (1358生，28歲帝師)
  - Rnam sras rgyal mtshan (1360生，49歲死)
    - Dpon chen Kun dgaḥ blo gros rgyal mtshan dpal bzaṅ po
    - A. Dbaṅ Nam mkhaḥ legs paḥi rgyal mtshan (1399生，1415封，49歲1444死)
      - B. Nam mkhaḥ rgyal mtshan dpal bzaṅ po (1435生；1463死)
        - Nam mkhaḥ rin chen rgyal mtshan dpal bzaṅ po (1453生)
        - C. Nam mkhaḥ bkra çis rgyal mtshan dpal bzaṅ po (1458生)
          - Bdag ñid chen po Sa lotsāba Ḥjam paḥi dbyaṅs kun dgaḥ bsod nams grags pa rgyal mtshan dpal bzaṅ po (1485生，1533死)
          - Bdag chen Ṅag gi dbaṅ phyug grags pa rgyal mtshan dpal bzaṅ po
          - Ḥjam dpal grags pa
          - Ḥjam dbyaṅs tshe brtan bkra çis
  - Bdag chen Chos kyi rgyal mtshan (1359生，70歲死)

とあって、この斷片的な記事の間の事情を說明している。王子の名は系圖のナムカギェンツェンペルサンボに一致しているが、唯父のナムカレグパは四十六歲で一四四四年に歿したことになっており、これでは景泰七年（一四五六）又は天順元年までは生存していないことになる。しかし年老いて止むを得ず職を子に讓ったというからには四十六歲で死亡した筈はない。トゥッチ氏の系圖の方に何らかの誤があるのであろう。

ナムカギェンツェンに次いで立ったのはその子のC、ナムカタシーギェンツェンペルサンボ Nam mkhaḥ bkra çis rgyal mtshan dpal bzaṅ po である。卽ち實錄成化五年正月辛巳の條には、闡化王、闡教王とともに輔教王南葛堅參巴藏卜の子「葛剳失堅參叭藏卜」ko tɕa ʂɨ tɕiɛn tsʻɑm *pa tsɑŋ pu を封じたことをいうが（史料二五三頁）、明傳を對照すれば後者の名は最初に喃字を脫落している。父のナムカギェンツェンは一四六三年に歿しており、一四六九年（成化五年）の封爵授與

は時期的にもよく吻合する。尚同じく成化十五年正月甲戌の條には輔教王の南渴堅粲巴藏ト nɑm ko tɕiɛn tsʻan pa tsɑŋ pu が遣使來朝したことをいうが、この王は前代のB、ナムカギェンツェンではなく、C、ナムカタシーギェンツェンであり、タシーの漢字音譯を缺いた形と見なすべきである。

輔教王の遣使入貢は嘉靖時代まで斷續的に行われるが、その王名はC以後は全く記されず、漢文獻の上での系統追求は不可能になる。しかし右の檢討によって輔教王がサキャパのドゥェチョエ系であり、タグツァンパとは彼等を指すものであることは確實に證明できたと思う。

以上長々と八大教王の系統年代を檢討したが、これを表記すると次のごとくなる。

大寶法王　カルマパ
大乘法王　サキャパ・ラカン系
大慈法王　ゲルグパ
闡化王　パグモドゥパ
贊善王　リンツァンパ
護教王　サキャパ
闡教王　リゴンパ
輔教王　タグツァンパ

右のうちカルマパ、パグモドゥパ、リゴンパはカーギュパの分派であり、タグツァンパ、リンツァンパはサキャパの分派である。卽ちカーギュパは三人の教王を出しているが、サキャパは四人の法王を出している。結局分派はしているが、これが明代の各宗派の大勢であるとすれば、やはりサキャパの勢力は尚宗教上は元代に劣らず相當なものであったことは否めない。分割統治とはいうもののサキャパの勢力は依然としてチベット各地に根强く擴がっていたのである。

又最初の三大法王はその勢力範圍を各々東チベット、中央チベット、西チベットに持っている。明朝はその三大地域における最大の宗派が何であるかは夙に熟知していたのである。三大法王を設定し、その間の小空間に五人の教王を配置したのは、當時のチベットの現實からして實情を全くよく把握した施策といわざるを得ない。而してこれらの諸教王の封爵が殆ど永樂時代に行われたのを知るとき、我

我は更めて成祖の對チベット政策が如何に適確に行われたかという點に感嘆の念を禁じ得ないのである。〔完〕

〔註〕

①第四代シャマルパの極めて簡單な傳記はリチャードスン氏によって發表されている（KS. I. p. 150）。

②佐藤長「明代チベットのリゴンパ派の系統について」東洋學報四五卷第四號。

③テキストには Ḥjin rten mgon po とあるが、ḥjin は ḥjig の誤と見なす。

④テプゴンでは Gtsaṅ shig.

⑤前掲論文一七頁の第五表を參照されたい。

⑥Woodwille W. Rockhill, Land of Lamas, New York, 1891, p. 351.

⑦實錄宣德元年三月己亥の條には「靈藏贊善王子鑽南監藏」等がラマの領占扎思巴を遣して馬を貢したことが記されているが（史料七七頁）、鑽南監藏 tsuœn nam tɕien tsaŋ は Bsod nams rgyal mtshan、領占扎思巴 liŋ tɕiam tɕa sɨ pa は Rin chen grags pa であろう。順序からいえば、このソェナムギェンツェンは前年に王の襲職を命ぜられたナムカギェンツェンの子に見えるであろうが、實錄にはこのとき未だ贊善王としてのナムカの名は現れていないので、ラグパペルサンポの子と見たい。ナムカの長子、次子は後に述べるが、ともにソェナムギェンツェンではないことが一つの傍證となる（八一頁參照）。

⑧bisun pa はレーリッヒ氏によれば、獨身の僧侶を意味するという（BA. p. 306）。

⑨館覺は管覺 kuœn tɕau とも書かれる。實錄永樂十一年二月己未及び十二年正月己卯の條に、「管覺灌頂國師護教王」とあり（史料六三、六四頁）、同じく宣德四年四月の條に「管覺護教王」とある（史料九九頁）。

⑩ダス氏によればラサの西方の山中に Stag tshaṅ ra ba stod という有名な庵があるというが（TED. p. 548）、恐らく同一の場所ではあるまい。